



京丹波町
KYOTAMBA TOWN

京丹波町農業委員会だより

第23号

令和4年3月発行



京丹波町食のキャラクター
味夢くん

京たんば



にぎわう朝市(道の駅)

目次：

委員がGo！④	黒大豆もぎ取り体験 ～申込み殺到！昨年の2倍を超える（坂原圃場）	2
委員がGo！⑤	服作りは綿花栽培から ～デザイナーの挑戦（質志）	3
委員がGo！⑥	町内ぶらり取材日記 ～「談酒館」に行ってきた（上太久保）	4
委員がGo！⑦	京丹波特産 黒大豆栽培 ～栽培農家を取材しました（富田）	5
委員活動	農業者へのアンケート結果（農政部会）	6
お知らせ	加入しよう！絶対お得な農業者年金！	7
委員活動	町行政への意見書提出	7
お知らせ	感謝状贈呈とシャッターチャンス	8
升谷サル追払隊とその後～課題に迫る①		
全国農業新聞を読もう～役立つ情報満載！	編集後記	

表紙の説明

京丹波町には4つの道の駅があり、それぞれで朝市を開催しています。

今回お邪魔したのは、京都縦貫道、丹波インターチェンジから3分に位置する道の駅「丹波マーカー」の朝市。その日の朝に収穫された新鮮な野菜や花き、手づくりの加工品など地元農家の自信作が並びます。

朝市の開催日は、火・木・土・日と週に四日。町内外から多くの来客であふれています。

～コロナに負けず、頑張れ！京丹波～

発行／京丹波町農業委員会 編集／京丹波町農業委員会広報部会

〒622-0292 京都府船井郡京丹波町蒲生蒲生野487番地1

電話 0771(82)3822

FAX 0771(82)2700

委員がGO!④ 黒大豆枝豆もぎ取り体験

申し込み殺到! 昨年の2倍を超える(坂原圃場)

令和3年10月20日から11月6日の18日間、坂原区圃場(和知地区)30アールにおいて、黒大豆枝豆のもぎ取り体験が実施されました。

この企画は、黒大豆栽培農家と圃場に隣接する道の駅「和」がタイアップし、昨年度から取り組まれていきます。体験内容は、圃場の中で気に入った株を体験者自身が収穫し持ち帰ってもらうというもの。今年は、道の駅「和」から利用者に宛てたダイレクトメールを送るなど農家と道の駅「和」の収益増にも工夫を凝らしました。圃場を管理する栽培農家は、体験者に満足いただくことを第一に考え、虫食いが少なく、プリプリのサヤがたくさんつくよう一株一株、細心の注意を払い栽培に専念してきました。

完全予約制とした昨年度の利用者は、三百三十九名。予約以外も受け入れた今年は、なんと七百十一名と昨年の2倍を超える結果の体験者数となりました。

栽培農家と道の駅「和」職員などで構成したスタッフは、始め



から終わりまで、まさに『てんてこまい』でしたが、来場者に京丹波町の良さを伝えたいと笑顔で親切な対応を心がけました。この努力が来年への大きな懸け橋となることは言うまでもありません。

もぎ取り体験が終了した後の圃場には、残念ながら英が少くない株が残ってしまうことになりました。この残った株の有効な収穫方法についてもお伝えしたいと思います。

写真 にぎわう黒大豆枝豆もぎ取り体験



圃場に残ったまばらな株の収穫は労力だけでなく、英数の少ない株自体を見ることは、栽培者にとつて楽しいものではありません。そこで、再度ダイレクトメールにより、黒大豆収穫体験として参加者を募ることにしました。

体験者に収穫した英重量1.5キログラムをベランダ等で十分乾燥させてもらい、12月中旬ごろに英から取り出した黒大豆をおせち料理として利用してもらおうという企画です。ご存知のとおり、おせち料理で使用する黒大豆は、枝豆と違い手間暇かかる分、非常に高値となります。自らが収穫し乾燥すると価格もお得に、また、自分自身が手をかけることにより愛着もわくはず。新しい年のスタートに手がけた最高の煮豆で、ますますマメに一年を過ごせるといいませんか。この黒大豆収穫体験も好評で今年の参加者は百名と昨年より増えました。

農業委員の私自身も黒大豆栽培農家の一人でありスタッフとしてこのイベントに参加しました。以前から「都市住民が黒大豆枝豆や黒大豆収穫体験に気軽に来れ、秋の実りを感じることが出来る里と認識してもらいたい。」という強い思いを持ってきました。委員活動で8月に調査した担当地区農地の利用状況から利活用の大切さを再認識したばかりであり、都市住民を巻き込んで農地の活用を図るこの取組みは、高齢化や獣害による農地遊休化防止への有効な手段のひとつとして確信を深めました。継続した成功例となるよう地元農家ともども頑張りたいと思います。

《広報部会委員 谷 義春》

委員がGo!⑤ 服作りは綿花栽培から

デザイナーの挑戦(質志)

最近、サステイナブルな社会(環境を壊さず限りある資源を使い切らないよう将来にわたって持続していける社会)とか、SDGs(エスディージーズ:持続可能な開発目標)という言葉をよく耳にするようになりました。京丹波町に移住し、ファッションという切り口から自然と人間のかかわりを真摯に見つめ、深く考えておられるご夫妻を取材しました。

令和2年12月に大阪から京丹波町質志に移住されたファッションデザイナーの興梧(こおろぎ)仁さん、景子さんご夫妻。築百五十年の古民家をアトリエと店舗を備えた住居に改装し、服作りと自分たちの生活スタイルをSNSで発信されています。

ご夫妻は、ファッションブランド『ROGGYKEE(ロギーケイ)』を平成18年に立ち上げ、平成24年からは、毎年パリコレクションに出品。高い評価と称賛を得て、多くの著名人にも支持されるブランドとして多忙な日々を過ごされてきましたが、大量生産と大量廃棄を前提として成り立つファッション業界の在り方に疑問を感じ、自然の中でサステイナブルな服作りがしたいという思いを抱えてこられたそうです。

コロナ禍をきっかけに京丹波町に移住されたご夫妻は大阪での都会生活から、野菜作りや山菜、野草など人間本来の食生活を中心としたライフスタイルへと百八十度転換。親しみやすく温かい人柄と積極的に地域に関わるご夫妻の姿に多くの地元ファンも生まれ、発信するSNSも多く共感を得ています。

また、今までの都会的で先鋭的な服作りから、自然と調和し生活のエッセンスを生かした服作りへとシフトし、田や畑での作業着をモチーフにした『NORAGI(ノラギ)』コレクションを発表しました。



資源活用の観点から、令和3年6月にオープンしたセレクトショップ『Tomoribi(トモリビ)』には、古着や古生地、服を作るときに出てくるはぎれを使って、スリッパやぬいぐるみ、座布団などの日常で使うものや生活を彩るものに

リメイクした小物を中心に、『ROGGYKEE』の服や京丹波周辺の陶芸家・ガラス工芸家の作品、藁細工や古物などご夫妻の眼で選り抜かれた品々が並んでいます。10月には、和知の藁細工職人の方を招き、しめ縄作りのワークショップも開催されたと伺いました。「この『Tomoribi』は、京丹波のいいものを多くの人に知ってもらおうみやげ屋さんみたいになつたらいいですね」と話される仁さん。私も同感です。

自然に根ざし、地に足のついた循環型社会を目指すアクションの1つとして、綿花の栽培も開始されたご夫妻。5月に、所有田(約7アール)に綿の種を蒔きました。生育途中で、鹿に食べられ5分の1ほどになってしまいましたが、残った綿花は写真のようにきれいな花を咲かせ、11月には綿のようなものが入っている状態に生育。今回は、綿が飛び出す弾けた状態までには至りませんでした。が、「たくさん綿がとれるまで、気長に続けていきたい。種を増やし栽培した綿花から撚った糸を自らの手で機織りし布にする。その布から小物や服などを作りたい。」というサステイナブルな社会を目指す一つの答えとして、取り組み続けている姿に感動しています。

たくさん綿の花が秋に見られるようになるのが今から楽しみです。

《広報部会委員 北村 辰浩》



写真 興梧さんご夫妻

委員がGo!⑥ 町内ぶらり取材日記

「談酒館」に行ってきた(上大久保)

今回は、京丹波町上大久保にある「談酒館」を訪ねました。「談酒館」とは、地元産のジビエや食材を使った食肉加工品や総菜を手掛ける会社。調理のプロでもあり猟師でもある藤田義晴さん自身が目利きしたジビエや地元食材のみを使い、燻製やそぼろ煮・生肉等を製造・販売されています。



今年一番の冷え込みで薄氷が張る朝だったが、午後にはポカポカと陽気を感じられるようになったところで、京丹波町上大久保に向けて軽トラを走らせる。予めグーグルマップで下調べはしていたが、予想以上に狭い一本道にビビりながら軽トラをすすめると、「談酒館」の看板が見えホッとする。予定時間より若干早かったが、藤田さんが笑顔で出迎えてくれた。薪ストーブがあるリビングに招かれる。藤田さんは「猟師」というイメージ(あくまで個人的なイメージです)からはかけ離れた、柔和な雰囲気を持ち主だった。実際会うまでは、「気難しい人やったらどうしよう!」とか「切り刻まれたらどうしよう!」とか思っていたが、杞憂に終わった。

世間話を交えながら、起業のきっかけから伺った。もともとは単身赴任のサラリーマン。定年退職を機に四十数年のサラリーマン生活に別れを告げ、生まれ故郷で田舎暮らしを満喫するつもりだった。しかしここで田舎暮らしにもれなく付いてくる「獣害」というものに初めて遭遇し、夢と希望に満ちあふれた田舎暮らしは、音を立てて崩れていく。



大型の冷凍ストッカー。商品ごとにきれいに整理され、出荷に備える

そうこうしていると地元から「藤田さん、獣害なんかならんかねえ!」と相談をもちかけられたことをきっかけに、わな猟免許を取得。狩猟の道に踏み込んだ。しかし勢いよくその道に飛び込んだものの、わな猟を基本から教えてくれる先輩猟師もいない中で試行錯誤を繰り返し、幾度となく危険な目(イノシシが自分に向かって突進!死んだと思った)にも会いながらも技術を磨き、後に銃猟免許も取得する。調理師免許はサラリーマン時代に取得済み。捕獲したシカやイノシシを自分でさばいて調理・加工し、それを肴に仲間内で酒を飲むことが楽しみの一つとなった。気の合う者同士では付度なしの厳しい意見が飛び交う。そこで出た貴重な意見を参考に研究を重ねた結果、「これは売れるんちゃうか」「これやったらいけるでえ」ということになり、仲間の後押しもあって平成28年に起業に至った。

ジビエの利用で必ず問題になるのがジビエ特有の匂いや衛生問題。これらの問題の多くは、捕獲方法や後処理に問題があるといい、藤田さん自身が最も時間をかけて研究してきたポイントでもある。捕獲や止め刺し方法、止め刺し箇所、保管・運搬方法、解体方法:こだわるポイントは多い。しかしそれら全てが「藤田基準」をクリアしないと、せっかく捕獲した獲物でも廃棄することもあるという。例えば罠にかかった獲物を止め刺す(仕留める)時も、消化器を損傷しないようかつ苦痛を与えないようにすることが、良い肉の絶対条件とのこと。なぜなら、暴れて体温が上がると肉の鮮度に影響するからだ。藤田さんは自分で納得できる方法で捕獲・処理したもの以外は加工に供しない。適切な環境で育てられた家畜と違い、野生で生きる動物を捕獲し、その肉を食材として扱っていく以上、「猟師」として



軽トラのまま入ることが出来るさばき場。クレーンで獲物を吊り上げる

ての確かな技術と経験はもちろん、「調理」のプロとして食材に
対する眼力と厳しさが求められる…って考えると、藤田さんって
「猟師」や「調理師」じゃなく「猟理人（りよりんにん）」って
肩書きが正解かも…。

談酒館

最後に「談酒館」という屋号の話。「談酒
館」と聞いた時、「何してはんの…」という
疑問がまず沸いた。多くの人がそう思うに違
いない。実は藤田さんがサラリーマン時代、二足のわらじを履い
ていたことがあったらしい。詳しくは割愛するが、その時の屋号
が「談酒館」という名前で、その書体も含めて醸し出す独特の雰
囲気が忘れられず、今回新たに始めた事業にも「談酒館」と命名
したそう。藤田さんの経営理念の中に「安心できる食文化の構
築」「地域への貢献」という言葉がある。「談酒館」という文字
の中には、「ジビエ料理を囲んで一杯やりながら、地域のことを
大いに談（かた）ろうじゃないか」という、藤田さんの経営理念
がしっかりと書いてあるような気がした。

《広報部会委員 宇野 栄晃》



加工場にて。加工場は徹底的に衛生管理され、どこも
ピッカピカ!!



「談酒館」の看板の前で。藤田義晴さん

委員がGo!⑦ 京丹波特産 黒大豆栽培

栽培農家取材しました(富田)

需要に供給が追いつかないという京丹波町産の黒大豆。12月
に入ると道の駅等の直売所では、黒大豆を求める声をよく聞かま
す。この黒大豆栽培に関わって10年になるという山本正行さん
(富田)にお話をお聞きしました。

山本さんは、無農薬と有機肥料にこだわり栽培(50ア
ー)。その他に黒大豆枝豆、水稲、野菜、シイタケ(原木三百五
十本)と多くの種類の作物を栽培しておられます。

黒大豆は、自然環境に左右され、特に天候や病気による収量減
や手間暇がかかるのが難点ですが、毎年が勉強と収穫に精を出さ
れていました。安心・安全な作物を家族に食べさせたいとの思い
から環境保全型農業について、町の指導を受けたり、有機認定農
業資材を使用していますとのこと。

京丹波のブランドに恥じない大粒でおいしい黒大豆が食卓に並
ぶ姿を想像すると取材した私もうれしくなります。

《広報部会委員 山内 建夫》



写真 収穫に一生懸命! 山本正行さん

農業者へのアンケート結果（農政部会）

農業委員会では、12月の意見書提出に向け、認定農業者、農業法人、農家（農事）組合長を対象にアンケートを実施しました。概要をお知らせします。（回答率53パーセント）

○農地に関して日頃感じていること

農地の維持管理が大変、農地を減らしたい（79人）
農地を取得したい、集約化を行いたい（12人）

高齢化が進み、10年先の農地維持管理が不安という意見が多く、担い手不足等による農地の維持管理に苦慮されている実態が浮き彫りになりました。

○遊休農地の活用について

取り組んでいない（54人）
取り組んでいる（18人）

耕作条件が悪い、担い手不足のため保全管理としてしか活用できないとの意見が多く、京力農場プランの推進や地理的要因を考慮した町独自の対策等の必要性がクローズアップされました。

○有害鳥獣対策について

効果がある（51人）
効果は不十分（31人）

獣害防止柵によりほぼ被害がなくなった、対策の効果が減少している。ハクビシン等の小動物被害が多いとの意見により、現状の支援と合わせ、現状に即したきめ細やかな支援が必要です。

○新型コロナウイルス感染症の影響

影響がある（47人）
あまり感じない（45人）

特に米価下落への対策と支援をすみやかに実施して欲しいと切望する意見が多く、生産者が安定した農業経営ができるための支援、対策の早急な実現が必要です。

委員会では、農業者の想いを伝えるべく、令和3年12月22日、町行政に対し、意見書を提出しました。

ご協力ありがとうございました。
農政部会

個人年金を検討されている方、ぜひ地区担当委員にご相談ください

加入しよう！農業者年金

各種申請用紙の
記入もサポート
試算もOK！

加入資格は3つだけ！！

- ① 20歳以上60歳未満の方
- ② 国民年金の第1号被保険者
- ③ 年間60日以上農業に従事する方



京丹波町のキャラクター
味夢くん

少子高齢化に左右されない終身年金！

- ・積立方式、確定拠出型。運用益は、非課税で年金原資がアップ。
- ・80歳までに死亡した場合、死亡一時金を遺族が受け取れます。

保険料は、月額2万円から6万7千円までの間で、千円単位で自由に選択！

- ・保険料は、途中脱退や再加入も可能。農業経営の状況や老後設計に合わせて選択。

税制面の大きな優遇！

- ・支払った保険料は、同一生計の家族分を含め全額が社会保険料控除の対象。
※個人年金の社会保険料控除額は、年間の保険料額が8万円以上で4万円（旧制度の場合、保険料額が10万円以上で5万円）が最大。農業者年金の場合、保険料が最低額の1万円でも12か月で12万円が社会保険料控除額になります）
→保険料の全額が社会保険料控除！受取るときも公的年金控除の対象！

一定の要件を満たせば政策支援（保険料の国庫補助）の対象に！

写真左から 松野委員、川邊職務代理者、山田会長、畠中町長、野口委員、下村委員



町行政への意見書提出

「農業者の想いをかたちに！」（農政部会）

令和3年12月22日、農業者の想いが詰まった「意見書」を、山田会長（農業委員会）から畠中町長（京丹波町）に手渡ししました。

町行政への意見書は、農業委員会等に関する法律の規定に基づき、農地等利用の最適化に向けた農業者支援の充実、施策展開に向け毎年12月に提出しています。今年は、農家（農事）組合や農業者へのアンケートから、特に意見が多かった5つの課題を選定しました。主な内容は以下のとおりです。

- 1 新型コロナウイルス感染症対策について
コメを中心とする農産物価格安定対策の確立と持続可能な経営支援を！
- 2 小規模農家への支援について
重要な役割を果たす小規模農家、兼業農家への支援を！
- 3 遊休農地対策について
京丹波農産物の更なる推進及び町独自の農地を再生利用するための事業や仕組みづくりを！
- 4 有害鳥獣対策について
きめ細やかな対応ができる支援や制度の導入を！
- 5 スマート農業の推進について
更なる支援の拡充と積極的な活用を！

シャッターチャンス！撮影アルバム



写真 岩山神社（塩田谷）

昨年末の大雪の際、雪化粧した地元岩山神社です。（清水淳之助委員）



写真 年越しソバ（白土）

22号でお伝えした白土区のソバ打ちの様子です。（山内建夫委員）

近畿農政局長から感謝状贈呈

写真左から 森田委員、岩崎委員、山田会長、大坪局長、畠中町長



令和3年11月25日、京丹波町農業委員会を代表して、山田進会長、岩崎弘一農地部会長、森田一三農地利用最適化推進委員代表に大坪近畿農政局長から感謝状が贈呈されました。

この感謝状は、8月5日に実施された農政局の現地調査において、府内でも先駆けて農地の全筆調査を行い、非農地判断を実施するなどの委員会活動が評価されたものです。

贈呈式の後には、畠中町長を交え、京丹波町の農政について意見交換を行い、今後の方向性と協力体制を確認しました。

升谷サル追払隊とその後

課題に迫る①

22号でお伝えした地域で取組むサル対策の続報をお伝えします。升谷区では、サル専用捕獲檻の設置に続き、令和2年度、サルの自由往来を防止するため、電源を太陽光発電とした電気柵を集落中央部に架かる上升谷橋（延長約百メートルのアーチ型橋）の左岸側に設置しました。令和3年1月末に結成したライングループ・升谷サル追払隊も参加者が増え、早期警戒と追払いに大きな成果が出ています。

夏から秋にかけての3か月近くは、「群れザル」の出入りもなく、黒大豆枝豆など農作物の被害は限定的となりました。ところが、「群れザル」は居なくなったわけではありませんでした。組織体制が整っていない隣の区内（市場区）に留まり農家を悩ませる事態が発生していたのです。

10月から11月にかけて、市場区の檻では3頭が捕獲されましたが、繁殖期に入ると市場に位置する丸山を根城に、「群れ」と「離れ」が入り乱れ、近くの農地に現れては被害を続けていたといえます。

「今後の課題は、約25頭と見込まれる『和知C群』の行動範囲の区域全体で、出

没や移動情報を共有する必要があると思うのです。」升谷区で中心的にサル追払いを担うある隊員の言葉です。行動圏となる地域5集落（中山、升谷、市場、大倉、小畑）で連絡会の立ち上げの必要性を強く要望されています。集落内の個別の追払いも同様ですが、追払うと移動する、このことの繰り返しだけでは、農作物は守れません。

各区の地域農業の担い手や希望者が参加いただき、ライン活用で効率的なサル追払いを実現しませんか？

参加希望やご意見をぜひ、地区担当の農業委員 山内康彦（升谷）までお知らせください。人間も境界を越えて一緒に追払いをしましょう！よろしく願います。

《広報部会委員 山内 康彦》



写真 檻の中でジャンプするサル

全国農業新聞を読もう

おすすめポイント

農業委員・推進委員の活動事例も載っています。農業の最新情報や地域の明るい話題などを紹介！あなたの知りたい情報をキャッチしよう！

京丹波町の話題もたくさん掲載！

発行 毎週金曜日 購読料 月額 700円

★購読申込は、お近くの農業委員又は事務局まで



編集後記

第23号となる「京丹波町農業委員会だより 京たんば」は、いかがでしたか。

広報部会委員が様々な場所にお邪魔し、取材をさせていただきました。取材を通じ、私たち自身が勉強させていただくことがたくさんありました。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございます。ご覧いただきました感想などをお気軽に事務局までお寄せいただけたらと思います。

今後も、より良い紙面づくりを目指し、精進してまいります。

（広報部会長 宇野 栄晃）

広報部会委員

